

研究ノート 魚学史—日本の魚を研究した人たち 瀬能 宏 (学芸員)

「魚学」、すなわち魚を研究する学問を「魚類学」と言います。魚に関するありとあらゆることを研究するわけで、主なものに、分類学、形態学、生態学、生理学などの分野があります。中でも分類学は、あらゆる研究の基礎として重要なものであり、ここで紹介する日本の魚の研究の歴史とは、分類学的研究の歴史と言い換えてもよいでしょう。

日本の魚を研究した最初の人は誰！？

さて、日本からは、現在4000種類近くの魚が記録されていますが、日本の魚を初めて学名で記録したのはオランダの開業医だったハウトイン (M. Houttuyn; 1720-1798) でした。1782年、彼は植物の研究で有名なツェンペリー (C. P. Thunberg; 1743-1828) が日本から持ち帰った36種類の魚類標本を記載しました。現在でも、ハウトイン命名の学名は、食卓でお馴染みのムツヤマスバを含む14種類の魚で使われています。1793年には、ツェンペリーもまた日本の魚をわずかですが新種として記載しており、オニカサゴやイサキの学名は彼が命名したものです。ツェンペリーは、晩年、「日本動物誌」(1822-1823)を著し、日本産の魚類53種をリストとして公表しています。体系的な魚類誌はテミンクとシュレーゲルの「日本動物誌：魚類」(1843-1850)に待たねばなりません。ツェンペリーのリストは、日本産魚類の学名のリストとしては初めてのものです。

大博物学時代の流れの中で

ハウトインやツェンペリーが活躍した18世紀後期、魚類の研究史の中でも特筆に値する本がドイツで出版されました。ブロッホ (M. E. Bloch; 1723-1799) の「魚類図譜」がそれです。この本は1785年から1795年にかけて9巻に分けて出版され、全部で432枚もの美しい彩色図版が含まれている大

著です。この本には、標本の入手先が日本とされている魚が36種類も含まれているのですが、実は本当に日本で採集された標本はひとつもないのではないかということが、琉球大学の吉野哲夫先生らの研究によってわかってきました。当時、ヨーロッパの博物学者は、魚の標本を標本商から購入していましたが、日本産とすれば標本が高価に取引できたため、ブロッホは悪徳標本商にだまされてしまったというのが事の真相のようです。

19世紀に入ると、フランスの博物学者キュビエ (G. Cuvier; 1769-1832) とバランシエンヌ (A. Valenciennes; 1794-1865) による「魚の博物誌」(全22巻, 1828-1850)、ドイツのミュラー (J. Müller; 1801-1858) とヘンレ (F. G. J. Henle; 1807-1885) による「横口類 (=サメ・エイ類) の系統的記載」(1838-1841)、イギリスのギンテル (A. Günther; 1830-1914) による「大英博物館所蔵魚類目録」(全8巻, 1859-1870) などの大著が相次いで出版されました。これらの本の中には、日本産の標本をもとに新種記載された魚が散見されます。また、オランダのブリーカー (P. Bleeker; 1819-1878) は、日本の魚に関する論文や報告を1853年から1879年の間に少なくとも19篇公表しました。

19世紀は正に大博物学時代と呼ぶにふさわしい時代で、イギリスやフランス、ドイツ、オランダなど、ヨーロッパの強国では、数え切れないほど多くの業績が公表されるようになりました。中でも、シーボルト (P. F. B. von Siebold; 1796-1866) が日本滞在中に集めた標本を、オランダのテミンク (C. J. Temminck; 1778-1858) とドイツのシュレーゲル (H. Schlegel; 1804-1884) が記載した「日本動物誌：魚類」は、日本の魚を科学的かつ系統的に記載した初めての著書としてあまりに有名です。この本には359種の魚が掲載されており、マイワシ、アユ、サヨ

リ、メダカ、タツノオトシゴ、シロギス、ブリ、マアジ、マダイ、イシダイ、マハゼ、ヒラメ、トラフグなど、私たちに馴染みの深い魚たちの多くが、この本で新種として記載されました。現在でも、150種ほどの魚に、テミンクとシュレーゲル命名の学名が使用されています。

以上、述べてきたように、19世紀半ばまでは、日本の魚類の研究は、大博物学時代の流れに乗った海外の人たちによって行われてきたのです。では、日本人の手による研究はいつ始まったのでしょうか。

日本人魚類学者登場

1869年(明治2年)、明治政府が医学教育に当時世界で最も進んでいたドイツ医学を範とする方針を打ち出すと、お雇い外国人教師として、博物学者たちが来日しました。中でも、先に当館で行われた特別展の主人公であるヒルゲンドルフ (F. M. Hilgendorf; 1839-1904) は、日本で最初に本格的な博物学の講義を行った点で注目する人物です。彼は1873年から1876年までの3年間、第一大学区医学校(後に東京医学校と改称; 現在の東京大学医学部の前身)で教鞭をとりました。その間、通訳を務めるなどして彼の影響を強く受けた松原新之助(1853-1916; 水産講習所(現在の東京水産大学の前身)初代所長)は、魚類学を体系的に学んだ最初の日本人となりました。松原が作成した「万国漁業博覧会出品目録」(1880年; 於ベルリン)は、日本の魚を欧文と学名で紹介した、日本人の手によって作られた最初の印刷物です。このことから、ヒルゲンドルフは、正に「日本の魚学の事始め」のきっかけを作った人物と言えるでしょう。

ヒルゲンドルフの離日後、ドイツからは最後のドイツ人博物学教師としてデーデルライン (L. H. P. Döderlein; 1855-1936) が来日しました。彼もま

た、多数の標本を本国に持ち帰りました。それらはウィーンの魚類学者シュタインダッハナー (F. Steindachner; 1834-1919) と共同で研究され、1883年から1887年にかけて、非常に質の高い報告書として世に出ました。しかし、ヒルゲンドルフもデーデルラインも後継者と呼べる魚類学者を日本では育てませんでしたし、松原もまた、分類学を中心とする魚類研究への道を進むことはありませんでした。

真の日本魚類学の父

20世紀初頭、事態は一変します。アメリカのジョルダン (D. S. Jordan; 1851-1931) とその一派による本格的な日本産魚類の研究が始まったのです。ジョルダンは魚類学者で、スタンフォード大学の学長にまで登りつめた人物ですが、研究者として超一流であっただけでなく、非常に多くの弟子を育てた教育者としても超一流でした。余談ですが、皆さんはモース (E. S. Morse; 1838-1925) の名をご存じでしょう。東京帝国大学理学部の初代動物学教授で、1877年から1879年まで日本に滞在し、大森貝塚の発見などで有名なあのモースです。実は、初代動物学教授の候補には、モースの他にジョルダンの名もあがっていたのですが、ジョルダンが決めかねているうちにモースが採用されてしまったのです。歴史上傑出した魚類の分類学者であったジョルダンが、もし初代教授として赴任していたならば、大げさでなくその後の日本における魚類学、いや分類学の歴史は大きく変わっていたかも知れません。

話が少し脇道にそれましたが、ジョルダンは弟子たちを総動員して、日本の魚を片端から研究しました。わずか10年ほどの間におびただしい数の論文が公表されたのです。そのジョルダンの影響を受け、日本人初の本格的魚類分類学者となったのが、東京帝大理学部動物学教室の田中茂穂 (1878-1974) です。田中は生涯に170種近い新種を記載した他、論文、論説、総説、翻訳、意見文、紹介文など、無数とも

言える著作を残しました。とりわけ、41新種の記載を含む「日本産魚類図説」(全48巻, 1911-1930) や、過去の文献を網羅し、1235種の魚類を収録した「日本産魚類目録」(1913; ジョルダンおよびスナイダーと共著) は代表的なものです。正に「日本の魚類学の父」と呼ぶにふさわしい活躍をした人でした。ジョルダンや田中の研究により、日本の魚類相の概要がほぼ明らかにされ、後の魚類研究の基礎が完成したと言えるでしょう。

田中門下からは、天皇陛下のハゼのご研究を指導した富山一郎 (1906-1981)、様々な分類群の研究を行い、普及的著作を含む膨大な業績を残した阿部宗明 (1911-1996)、高知大学で深海魚や熱帯性魚類の研究を行った蒲原稔治 (1901-1972) などを輩出しました。ただ、田中の活躍の舞台となった動物学教室は、昭和の初めに分類学から実験生物学へと研究方針を転換したため、分類学の研究活動の場は、地方の大学へと次第に分散してゆきました。

超人的魚類学者現る

戦前戦後を通じて、最も優れた日本の魚類学者を一人選ぶとすれば、迷うことなく松原喜代松 (1906-1968) の名をあげることができるでしょう。松原の偉大さは、1)日本人魚類学者としては初めて、系統縁関係を念頭において魚類の分類学的研究を進めたこと、2)すさまじいまでの執念、あるいは情熱といった言葉がぴったりくるほど、レベルの高い多数の業績を残したこと、3)非常に多くの弟子を育て、同年代だけでなく、後の多くの魚類学者に大きな影響を与えたことに集約されます。

松原は、水産講習所を1929年に卒業し、同時に同所に就職し、以後17年務めた後、京都大学の教授として20年を過ごしました。この間のエネルギー的な活躍ぶりは、ここではとても紹介しきれませんが、1943年に2回に分けて公表された彼の学位論文「日本産カサゴ目魚類の系統分類学的研究」

(資源科学研究所特別報告)、日本産魚類の分類学的研究のバイブルとも賞賛された「魚類の形態と検索」(全3巻; 石崎書店, 1955年)、魚類の形態や系統についての体系的な教科書「魚類」(動物系統分類学第9巻(上・中); 中山書店, 1963年)、大学における魚類学の教科書となった「魚類学(上・下)」(落合 明および岩井 保らと共著; 恒星社厚生閣, 1965年) などが代表的な著作です。

現在、松原の育てた弟子や孫弟子たちは、北は北海道から南は沖縄まで、全国の大学や博物館、水産研究所等の研究機関に散らばり、日本における魚類研究をリードする立場として活躍しています。そして、弟子が弟子を育て、これからも日本の魚類研究を力強く支えてゆくことでしょう。

おわりに

1998年9月21日、1998年度日本魚類学会年会(於高知大学)において、シンポジウム「魚類標本・資料の収集と管理—生物多様性研究の要をいかに構築するか」が開催されます。魚類学の発展のために、標本をきちんと管理するにはどうすればよいのかということを議論しましょうというわけです。国立大学には附属の博物館が建設され、公立の大型博物館が乱立する時代に、何を今更と思われる方も多いのではないのでしょうか。しかし、田中茂穂のコレクションでさえ、少なくとも過去30年間は、数人に満たないボランティアの方々の血の滲むような努力によって支えられてきたのが実状です。

先人たちのためまぬ努力によって、日本の魚類研究は、世界的にみても高いレベルに到達しました。しかし、研究活動を支える基盤は決して盤石なものとは言えません。特に、標本の収集や保管については、目を覆わんばかりの惨状にあることは、一般にはまったく知られていないのです。私たちはシンポジウムでの議論を謙虚に受け止め、日本の魚類学の今後の発展のために、さらなる努力を積み重ねて行く必要に迫られるでしょう。